

北海道自然保護協会の 発足とその活動

井手 賁 夫

いで・あやお
1910年岡山県倉敷市生まれ。
慶大文学部昭和10年卒業。
通信省通信博物館に就職後、
電波科学専門学校、東海大
学教授を経て、北海道大
学教授。停年後名誉教授後、
北星学園大学教授。現在日
本へッセ研究会、友の会日
本長、日本自然保護協会、日
独協会各評議員、北海道
文学会顧問。

最初の自然保護協会

私は昭和二十五年十月、当時清水にあった東海大学からその頃の東大の独逸語独文学の主任教授であった故相良守峯教授の推せんで北大文学部に赴任して来たが、当分は他の学部の人達とは余り交渉はなかった。やがて、同じ日本山岳会に所属している人々と近づきになって、後に北大山岳会を作ってから多くの友人知己を得るようになった。所が昭和三十四年の十月だったか、名物教授として名前だけは知っていた植物園長の館脇さんから突然電話がかかって来た。今度北海道自然保護協会というものが出来るから、君にもその評議員の一人になって欲しいというのである。どうして私がそんなものになるのですか、と聞くと、君は山によく登るし、新聞に時々ものを書くから利用価値があるのだ、という。そういうことなら自然は大好きだから出席しましょう、ということになった。

その協会は二ヶ月に一回位だったか、毎月一回だったか、よく覚えていないが、通知があつて、植物園の事務所の二階で、元勅任技師であつた林常夫さんを会長として開かれていた。そこに集まっていた人々は大体それまで私が全く知らなかった人達で、今井道雄、犬飼哲夫、宮脇恒、石川俊夫、小関隆祺の諸氏のほかに札幌宮林局長、道の林務部長、更に財界の人々もいたかも知れないが、よく記憶していない。

この集りで館脇さんは自然が無闇に荒らされている実例をいくつか話されて、出席者から時々質問が出される程度で、余り議論もなかったようで、雑談に終わっていたように思う。しかし何回目か私に私が、そんなに荒されるなら何らかの対策を社

会的に呼びかけなくてはいけないと提言したが、そんなことをしたら大変なことになると全く問題にできなかった。

それが昭和三十六年の夏であつたか、突然林常夫さんが会長を辞任されて、今井道雄さんを会長として、日本自然保護協会北海道支部として再出発することになった。支部長は勿論今井さんで、幹事に石川俊夫、小関隆祺、井手の三人が名ざされた。事務所は小関教授の研究室におかれた。私が幹事にされたのはその前年学会でヨーロッパへ行くことになって、ついでに折角自然保護協会に属しているのだから、この機会にヨーロッパの自然保護を見て来たいと館脇さんに相談したら、国立公園や海中公園の生みの親ともいべき東京の田村剛氏に相談するがいいと紹介して下さった。東京で田村さんに会って相談したら、丁度その年の六月中旬に、ポーランドのワルシャワで国際自然保護連合の総会が開かれるからそれに日本代表として出席するようにいわれた。当時赤いカーテンの内側のポーランドなど普通ではとても行けない所なので兎に角出席して、その関係でドイツ、スイス、オーストリアの自然保護団体の有力者に親友ができて、日本の国立公園について各地で二十数回も講演をして帰って来たということがあつたので、そのせいであろう。それで月に一回位小関さんから通知があつて、今井道雄さん、石川さん、私の三人が小関さんの部屋に集まった。どんな話が出たか全く記憶にないが、始めのうちは東京の自然保護協会から幾分の資金があつたらしいが、それも使い果たして、しまいに小関さんが身銭を切つて通知をよこすという状態になった。そこで演習林長だった宮脇さんと小関さんが林業

関係などをまわって資金集めをしたがどこからも一文の寄附もなかった。そのうちに大雪山の黒岳にロープウェイが作られるという話が新聞に出て来た。たまたま日本山岳会会員であった伊藤秀五郎、金光正次、渡辺千尚、井手の四人が集まった席で、何とか手を打たないと、大雪山の自然が大変なことになるといふ話になって、矢張り自然保護協会をしっかりしたものに、妨がなくてはならない、ということ意見がまとまった。しかし現実には資金も全くないのだから、これは協会を新しく作りなおす以外にない、ということでも今井さんも全くこれに賛成して日本自然保護協会から離れて、北海道自然保護協会として独立した組織を作ろうということになった。

北海道自然保護協会の結成

それで私は新しい協会を作ることに反対だった小関さんや館脇さんとは全く離れて、今井さんと協力して、昭和三十九年（一九六四年）四月頃から動き初めて、多くの有力者に発起人になるよう勧説してまわった。ようやく九十人近い人の賛同を得て、さて会長にだれを依頼するかということになった。当時北海道銀行の創立者であり、頭取であった島本融氏を第一候補として今井さんが説得したが、島本氏は固辞された。北海道銀行の道家齊次氏が拓銀の東條さんを押され、私がお願ひにあがったが却々承諾されなかった。昭和三十九年頃ではまだ自然保護の意義を多くの人が知らなかった。どうしても承諾されなかったのを、今井さんと私と二人でお願いに上ってようやく承諾された。ただ条件として、今井さんが副会長として東條さんを補佐するということがあった。

こうして三十九年の七月始めにはすっかり準備

がととのったが、有力メンバーと考えていた道の林務部長の都合がつかないということで結局発会式が開かれたのはその年も押しつまった十二月一日であった。そしてその間に黒岳と旭岳のリフト建設許可がおりたことをあとで知った。しかし協会が設立され、東條会長、今井副会長、犬飼副会長、井手理事長が決定するとすぐに理事会を開いて、黒岳と旭岳のリフトの終点の公園計画を作つて、ある程度荒廃をとめることができたのは幸いであつた。

勧告と要望

東條さんは会長となられてからはじつによく指揮をとられた。また当時の知事が自然保護に熱心な町村金五氏であつたので、知事の財政相談役の東條さんもやり易かつたといえよう。こうして理事も各方面の専門家になっていただいて、順次問題を審議して、しかるべく勧告又は要望をして、その目的を果した項目をあげれば大体次の通りである。

- 一、創成川緑地帯の一部を駐車場にすることの可否について（昭和三十九年二月一〇日）
- 二、北海アルプスの名称について（三九・一二・二四）
- 三、黒岳及びユコマンベツのケーブル施設について（四〇・一・一八）
- 四、豊平峡ダム問題について、特に従来の川沿いの歩道は拡幅することなく、ダムに行く道は別に自動車道路を作ること。（四〇・五・六）
- 五、日本最北端の碑の落書きについて（四〇・九・一六）
- 六、オコタンベ湖の保存について（四〇・一一・八）

七、恵庭岳スキーコースについて（四〇・一二・四）

八、小樽内川のサンショウウオの産卵地の保護（四一・一・二二）

九、自然公園内のレインジャー増強についての要望（四一・二）

十、支笏湖発電計画について（四二・四・三〇）

十一、ウトロのオンコ岩の採石問題（四二・五・二八）

十二、北大自然保護学科設置要請について（四二・七・一一）

十三、大雪山、赤岳より裾合平を経てユコマンベツに至る自動車道路について（四一・一〇・二九）

十四、真駒内団地柏丘及びみどりヶ丘の保護について（四一・一〇・二九）

十五、全日本登山体育大会の知床開催について（四一・一〇・二九）

十六、クッタラ湖の民有地の施設問題について（四二・一・二〇）

十七、バスガイドブックの誤りの訂正（四二・一・二〇）

十八、大雪山遊歩道計画委員会（四二・二・二一）

十九、ペンケ沼、パンケ沼の観光施設について（四二・三・一七）

二十、自然公園内に於ける諸問題に関する意見書（四二・二）

その他に

(一) 騒音防止について

(二) 無許可の立売人について

(三) 公園内の道路について

(四) 民有地の問題について

- (五) 売店、旅館などの下水処理について
 - (六) レインジャー増強と権限強化の件
 - (七) 自然公園内の施設の作り方について
 - (八) 地元の啓蒙の必要
 - (九) 観光祭の行ない方。
 - (十) 北海道の国立公園の事前審議について
- など、実に多様な難しい問題について種々論じあい、理事会として議決して関係各方面に要請して、夫々に効果をあげることができた。これらの中でも特に重要な項目についてなお説明を加えておきたい。

四、の豊平峡問題についてであるが、豊平峡の河ぞいの道路をたどって現在のダムに到達するあたりから、約三十米位の所が、急に両岸が岩にたまたまれて、その深い谷の中を溪流が流れていて、木曾谷の寝覚めの床を稍小規模にしたような美しい景観を呈していたので何とかダムをもう少し奥にずらして欲しかったのであるが、溪谷ぞいの道路はそのまま歩道として残して、工事のためや、その後の一般観光のために自動車道路を別に作るということで、妥協せざるを得なかった。このことは誠に残念であった。

恵庭岳スキーコース

七、の恵庭岳スキーコースについては我々は富良野のスキー場を改良して使って欲しかった。私達のこの要望を聞いた当時の国鉄北海道総局長は、それでは札幌から富良野往復の特別急行列車を編成して支障のないようにしようとしてまで申出てくれた。一方私はポーランドの国際自然保護連合総会で知りあって、親友となったインスブルックの植物園長ヘルムード・ガムス博士に相談して、まもなく開かれる国際自然保護連合総会に恵庭岳使用

反対を訴えることにした。そして理事の中でも最も強硬に恵庭岳の利用に反対していた伊藤秀五郎、高倉新一郎、石川俊夫と私の四名にガムスの名も連ねて、英独佛日、四ヶ国語の反対声明を国際連合宛に提出した。私としては総会で反対決議をして欲しかったが、総会には日本政府の関係者も出席していたのでそれはできなかったが、藜苔類の研究で世界的権威であり、ヨーロッパの各国語に通じていて、国際連合委員の中でも重きをなしていたガムスは、殆んど世界中の全理事の反対署名を集めてくれたので、私がこれをブランドージュ会長に送って善処方を求めた所、会長は直ちにJOC（日本オリンピック委員会）に私と話しあって善処をするように求めて来たので、JOC委員と私との交渉が始まった。私達は恵庭岳の使用にはどこまでも反対で富良野の滑降コースの改良を主張してやまなかったが、ある日、思いがけず日本山岳会の重鎮で、親しくしていた植有恒さんから手紙が来た。余り頑強に反対するとあなたの将来にも悪い影響があるといけないから、適当な所で妥協しなさいという忠告であった。いずれ政府のその筋が手をまわした、とは思ったが、そこで私は条件を出した。使用後は再使用しないで、植林して元形に復する、ということである。定めし非常な費用がかかるだろうが、自然を破壊することが、どれ程高価なものにつくかを知らしめて今後のいましめになりたい、と思ったのである。

コースの選定にあたったIIOC（国際オリンピック委員会）のシュピース委員（この人はインスブルックの人でガムスを通して知りあっていた。）は私達の要望にそって、出来る限り山容を傷つけないように、樹木の伐採も最少限に止めるように

努力してくれた。それだけにこのコースに愛着が深かったらしく、オリンピック終了後も、また恵庭岳のコースを利用して欲しい、と再三私に依頼して来たが、私はそのたびにはっきり断ったので結局富良野を整備することになったのである。

当時のIIOC会長ブランドージュ氏は一九七四年「近代オリンピックの遺産」（ベースボール・マガジン社）という書物の中でこういつている。

「札幌大会は大成功だった」と賞賛しながら「しかし札幌オリンピック組織委員会はこの大会に関連して七億ドル以上の金を使い、現在でも更に数百万ドルかけて競技場周辺の環境をも通りにし、二百万ドル近くもかけて作ったボブスレーのコースをとりこわし—全世界あわせてもボブスレーの選手は僅か数百人しかいない—また滑降コースの行われた斜面に再び植林しているのである。このため荒野に侵入し、環境を破壊することに反対する自然保護論者からは、冬季オリンピックに対する批判の声が高まっている。」といい、総括的に「いま思うと、オリンピック冬期大会の創設は、オリンピックのイメージを損ねた憂うべき失敗であった。」とまで言い切っている。

この度の長野県の冬期オリンピックに際して、最初、上信越高原国立公園の志賀高原にある岩菅山に滑降及びスノーパード回転の両競技場を新たに開発しようとしたのであるが、私達が恵庭岳の例を引いてこれに反対した直後に、岩菅山開発の発言者であったJACの会長が辞職してこのことは中止された。ここでも恵庭岳の再使用を中止させてこれを復元させたことが、一つのよい範例になったのである。

北大の自然保護学科

十二、の北大自然保護学科設立の件、というのは色々自然保護の問題にあたって見ると、こうしたすべての問題について学問的にしっかり研究して夫々の問題について科学的根拠を提出して処置することの重要性が強く認識されたのである。それで私はこの問題を理事会に提出して北大にそうしたことを研究提言する専門講座設立を要請することを提案し、承諾された。そこで東條会長が北大に赴いて当時の丹羽学長にそのことを要請した。そこでその設立検討委員会が設立されて、私もその委員の一人となって、当時医学部長であった現参議院議員の高桑榮松氏が委員長となった。所が委員会が開かれて見ると、各学部は夫々の専門家が新設される専門講座に引き抜かれて、夫々の学部の講座が減少することを怖れて、大多数の委員がこの研究講座の設立に反対であった。それは当時の自然保護問題の現況を説明して、いかにこうした研究機関が必要であるかを説き、各学部の懸念に対しては適切な処置によって解決されることを要請した。こうして委員会が設立に同意して、現在の環境科学研究科が設立されたのであった。高桑さんとは以前から大学紛争の際にも一緒に相談しあって個人的にも親密であったので大変幸いであった。

大雪縦貫道路

さて、町村知事が中央に去って、開発局次官であった堂垣内氏が知事になるに及んで大雪山縦貫問題が起って来た。新得からトムラウシ温泉を経て鹿越峠を越え、白金温泉、更に天人峽に至るこの道路については協会の大雪特別委員会は強硬に反対した。堂垣内知事はこの工事の推進者であっ

た。そして知事の財政顧問である東條会長は大雪特別委員会の反対決定を受けて、反対声明を公表するならば自分は会長をやめる、といい出したのである。東條会長は多忙の中をこれまで殆んどすべての理事会に出席し、非常によく代表者としての任を果たして来た。かつ拓銀頭取としての地位からいって、氏が会長の職にあることは協会の社会的な発言力に大きな重要性を与えていたので、殆んど全理事が東條氏のこの申出にかかわらず何とか打開の道を見出すことを望んだ。しかし環境庁の決定の時期が近づき、全国自然保護連合理事長であり、環境庁の審議会委員でもあった中村氏から北海道自然保護協会が反対決議を提出してくれない限りは審議のしようがないといわれて来たので、理事会の決定の意志を体して私は理事長名で絶対反対を打電すると共に、理事会を開いて（東條会長は欠席）反対を決議した。私はそれを以て東條会長に会い、理事会決定を告げた。東條会長は辞職し、今井副会長も辞職され、私は東條会長を辞職に追いこんだ責任をとって理事長辞職の決心をしたのである。

最近の北海道自然保護協会の会報（一九九四年七月号）五頁第三段八行目から九行目にかけて八木さんの発言の中に「東條さんは大雪縦貫道路問題でトンネル案を支持していたが、責任をとってやめている。」というくだりがあるが、これは事実と反する。東條会長は、当時の北海道自然保護協会が大雪縦貫道路反対を公表するならば会長をやめる、と前々からいっていたので、その言を買ったのであって、トンネル案を支持した責任をとってやめたわけではない。

なお館協教授が林会長をいただいて最初に作り

上げた北海道自然保護協会を第一次とし、東條会長の協会を第二次とし、そのあとの伊藤秀五郎氏が会長となった時代を第三次、石川氏が会長となった時代を第四次、ついで第五次、第六次とするようにすると時代区分の整理に便宜であると思う。従って第四次の社団法人になる以前の第二次の自然保護協会の活動を財界人のサロン風の集まりだった、とする説があることは甚だ誤った考えで、事実を誤認すること甚だしいものである。

